

## 人間の〈生〉の基本構造

### — 意味コミュニケーション世界の QOL —

森下直貴・中塚晶博

#### はじめに / 尊厳と QOL 尺度のあいだ

人は心身の衰えを感じたとき、自らの老いに直面して愕然とする。「介護」という人間の営みが立ち上がるのは、まさにこの場面からである<sup>(1)</sup>。介護の前には自立があり、介護の後には看取りがある。そして死別に続いて死者との語らいに移る。その介護と対照をなすのが「子育て」である。この営みもまた、未だ見ぬ我が子との語らいに始まり、出産の後には子育てが続き、最後は子離れ（自立）で終わる。つまり、介護は子育てとともに「世代をつなぐ世話」の一環なのである。

介護の目標とは一般に、介護される側の尊厳を守り、その幸福を実現することであるされる<sup>(2)</sup>。もちろん、尊厳や幸福を配慮されるのは介護される側だけでなく、介護する側でも同様であろう。ところが、「尊厳」や「幸福」といった観念はもともと多義的である上に<sup>(3)</sup>、社会全体が大きく変化し、超高齢化・少子化・過疎化・個人化が進行する中で多元化している<sup>(4)</sup>。その結果、どうすることが介護に関わる双方の側を尊重したことになり、また、何をもって双方が幸せであるとみなせるかに関して、関係者のあいだで共通理解が成り立たず、判断に迷う状況が生じている。

この曖昧な状況をさらに複雑にしているのが介護の経験のいわば一方通行性である。「介護を受ける」ということはどのようなものか想像することは、実際にその立場になった者でないと難しい。しかも、介護を受けた「経験者」と「未経験者」が交替する可能性はほとんどない。そこから「意味の不一致」が生じる。実際、要介護者の言動は介護者にとってしばしば不可解である。面白くもない話や自慢話を延々と繰り返すこともあれば、ひどい悪口や暴言が出てくることもある。介護する側に落ち度があるとも思えないのに、介護を拒否したり、突然不機嫌になって怒りだしたりする人もいる。施設では何度説明しても出て行くといい張って聞かない入所者に悩まされることも多い。介護者への「セクシャル・ハラスメント」はもはや日常茶飯事であり、施設入居者同士が「恋愛関係」になることもある。

介護現場では意味の不一致を背景にしてしばしば「管理する側とされる側」の関係が発生す

る。介護される側の「尊厳」や「幸福」はこの関係の中で介護する側が定めた「QOL 尺度」によって測定されることになる。問題はこの QOL 尺度である。一般に科学的な尺度によって掬い上げられるのは人間の生の表層の一部にすぎない。また、何らかの視点には必ず見えない側がともなうものである。しかし、QOL の管理する科学的な視点の場合、それ以上に、管理される側の微妙な思いが無視されたり、とりわけその「不幸」が覆い隠されたりする傾向にある。その結果、一般人には当然のように認められる振る舞いであっても、介護「される側」には許可されないというケースが多々出てくる。例えば、施設内でのプライバシー、入居者が一人で外出する自由、入居者同士の恋愛、施設内での自慰や性行為がそうである。

要するに、介護をめぐる今日、目標としての尊厳や幸福と既存の QOL 尺度とのあいだに、容易には埋めがたい「隔たり」が生じている。そしてこの隔たりによって、介護する側はジレンマや矛盾に悩まされ、介護される側は無理解や無視に苦しめられる。超高齢社会の将来、類似の状況はますます広がり、いっそう深刻化するはずである。この隔たりを少しでも埋めるためには何ができるのだろうか。筆者らがこだわりたいのは、たとえ迂遠であっても、「人間の生」を全面的に把握し、これによって両者に通底する共通の「構造」を発見することである。

本稿は、哲学的アプローチによって人間の生を全面的に把握し、その基本構造の提示を試みる。「哲学的アプローチ」とは<意味コミュニケーション>の視点を指す。この試みを通じて、既存の様々な QOL 尺度の「盲点」が焙り出される一方で、QOL 概念が実質的に拡張され、そこに「尊厳」や「幸福」が包含されることになろう。筆者らは、人間の生を中心にある「生活」の構造を介護現場に当てはめた場合、「問題行動」とされる振る舞いのほとんどが「コミュニケーション」の独特の表出として把握できると考えている。

そもそも常識・科学・思想の前提を不断に問い直すのが哲学であるが、大多数の哲学者が実際に行っているのは固定し硬直したものの見方を流動化することである。しかし、不完全さという批判を恐れるためか、そこから一步ふみ込んで理念と現実を媒介する「図式」<sup>(5)</sup>を構築するまでには至っていない。本稿ではあえてその不完全な構築に挑戦し、筆者らの考案による意味の<四区分表>に基づいて「人間の生の基本構造」を把握し、これを図式として提出する。ただし、老人介護は一例であって本稿の射程ははるかに広大かつ遠大である<sup>(6)</sup>。

## 1. QOL の概念枠組み

最初に QOL (Quality of Life) とこれに関連する概念をめぐる研究状況を概観しておこう。関連する概念には「ウェルビーイング」、「豊かさ」や「ウェルフェア (厚生・福祉・福利)」、「満足」や「選好」、「幸福」あるいは「幸せ」があり、さらに「健康」もある。これらの概念群を区別し関連づけることはなかなか難しい。本稿では関連する概念をすべて QOL に包括する方針で

あるため、ここではあえて区別せずに一括して論じることにしたい<sup>(7)</sup>。

「幸福」は古より人々の主たる関心事であった。これが QOL との関連で政策目標（「豊かな社会」）にされたのは 1960 年代の米国である。日本でも 1980 年代になると「心の豊かさ」が人々の関心を集めるようになり、その中で GDP に代わる幸福度尺度が作られ、国民の豊かさに関する調査も行われた。しかし 1990 年代半ばにはランキング比較を嫌う声があり、その後は中断されている。他方、長らく客観性を追求していた心理学であるが、ようやく 2000 年代に入ると主観的な幸福研究がにわかに増え始める。日本では 2011 年の大災害が転機となって国民の関心が高まり、幸福研究が進んだようである。ただし、幸福心理学は心理学の世界ではいまなおマイナー分野であるという<sup>(8)</sup>。

「幸福」や「満足」を用いる経済学や心理学に対し、「ウェルビーイング」や「QOL」を用いるのはおもに医療・保健・看護の分野である。ウェルビーイングは WHO の「健康の定義」を受けて日本でも早くから注目され、教育現場にも浸透している。ただし、幸福との境界の曖昧さについては当初から指摘されている。QOL の方は日本では遅れて 1980 年代に終末期や慢性病への対応をめぐる導入された<sup>(9)</sup>。1990 年代以降はとくに老年医学の分野で、アウトカム指標として QOL 尺度を用いた研究が盛んになり、現在に至っている<sup>(10)</sup>。

以上で概観した諸研究は、いずれも広義の QOL を対象にしているが、その捉え方は専門領域の関心を反映して様々である。しかし、ここで問題となるのはその捉え方の一面性である。経済学は QOL の客観的側面に注目し、これと財の大きさを同一視するが、主観的側面との関連については経験的な推測（「高収入なら幸せのはずだ」）に依拠している。それに対して心理学は幸福の主観的側面に関心を寄せるが、客観的側面との関連を方法論的に断ち切っている。他方、医療分野の QOL は健康関連の行動・情動レベルに限定されるか、逆に漠然としすぎて具体的な内容の乏しいものとなっている。そこで、個別科学の一面的な見地を離れ、哲学の見地から改めて QOL 概念を捉え直してみたい。

”Quality”も”Life”も一見するとじつに多義的である。先に”Quality”（質）から検討すると、そこには客観的な(objective)機能的品質（略して Qo）と主観的な(subjective)感じ方（略して Qs）の二面がある。Qo(Quality-objective)に当たるのは表出された言動、環境条件、受け継がれてきた人間の理想であり、他方の Qs(Quality-subjective)には主観的な感覚、意識、ものの見方・考え方が入る。

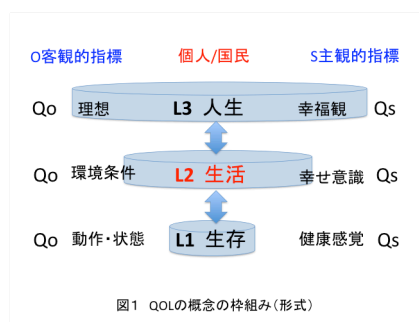
次の”Life”（生）はいっそう多義的である。これを整理するためにはレベル（階層）分けを導入しよう。社会医学・公衆衛生学の分野では「生」が「生命／生存／生活」の三レベルに区分されている<sup>(11)</sup>。しかし、人間の日常活動を考察の中心に置く限り、代謝や免疫といった生命レベルの機能は生物行動の基礎として生存に包摂されるし、人の生涯や一生といった時間幅も不可欠だろう。それゆえ、同じく三レベルでも本稿が採用するのは「生存／生活／人生」の枠組みであ

る。これは、生物に共通する行動としての「生存」(L1)、人間的な日常活動としての「生活」(L2)、死後まで含めて生活を時間的に包括する「人生」(L3)の三レベルから構成される。

なお、ここでの「生活」の意味は広義であり、狭義の生活すなわち衣食住の暮らしだけでなく、労働、教育、政治、芸術といった人間的な活動のすべてを包含している。人間の生の中心にあるのがこの広義の生活すなわち人間的な活動である。そして生活の基盤が「生存」であり、生活の総括が「人生」になる。

最後に、もう一つ考慮すべき論点が残っている。それが、QOL概念は個人だけに当てはまるか、それとも集合体(国民や人類)にも適用されるのかである。これに関しては、ミクロの個人であろうとマクロの集合体であろうと、Qの二面とLの三レベルは同様に適応できると考えておこう。さもないと、心理学と経済学を共通の枠組みの中で関連づけることはできない。

以上の整理をふまえたQOLの概念枠組み(形式)を図1に示す。ここで客観的なQoと主観的なQsはLのレベルごとに連関している。生存L1(生物行動)では、Qo1は科学的に検査される動作や状態であり、Qs1は主観的な健康感覚である。生活L2(人間活動)では、Qo2は職業・収入・学歴、家族・住居、表現の自由、余暇時間などの環境条件であり、Qs2は主観的な幸せ意識である。そして人生L3では、Qo3は文明・文化ごとに受け継がれてきた人間の「理想」であり、Qs3は自分の人生に対する総括としての人生観ないしは幸福観になる。



## 2. 既存の健康関連 QOL 尺度

上述の枠組みに照らして既存のQOL尺度を検討してみよう。比較的使用頻度の高い健康関連QOL尺度として、QOL-AD(アルツハイマー病患者用疾患特異的尺度)、EQ-5D-5L、WHOQOL26の3つを取り上げる<sup>(12)</sup>。これらの検討を通じて客観的要素と主観的要素の連関や、主観的評価と客観的評価の区分に留意しつつ、それぞれを特徴づける中でそのバイアスや盲点を浮き上がらせてみる。

まずはQOL-ADから<sup>(13)</sup>。これはアルツハイマー型認知症に関して想定される不都合をリストアップし、それぞれの指標の程度をスコア化するものである。指標を列挙すると、「身体的健康」(Qo1)、「活力」(Qs1)、「気分」(Qs2)、「生活状況」(Qo2)、「記憶」(Qo1)、「家族」(Qo2)、「結婚」(Qo2)、「友人」(Qo2)、「楽しむことができる」(Qs2+3)、「自己全体」(Qs1+2+3, Qo1+2+3)、「家事をこなす」(Qo2)、「金銭」(Qo2)、それに総合評価としての「生活全体」(Qo1+2+3)になる。

このうち「身体的健康」を含めて大半は客観的要素であるが、「活力」や「気分」、「楽しむことができる」は主観的要素である。「自己全体」は主観面と客観面の両方を含んでいる。この「自己全体」や「生活状況」は包括的で漠然としている一方で、他の要素と部分的に重複している。この尺度の場合、指標は身体レベルを超えて広く日常生活にまで及んでおり、また、検証によるその信頼性や妥当性も高いとされる。しかし、この評価は現在の臨床医学の文脈で理解された病像を反映しているにすぎず、むしろこの病像じたいの恣意性が問われざるを得ないだろう。

二つ目は EQ-5D-5L である<sup>(14)</sup>。指標は「移動の程度（歩き回る）」(Qo1)、「身の回りの管理（身体洗浄や着脱）」(Qo2)、「ふだんの活動（例として仕事、勉強、家族、余暇活動）」(L2)、「痛み/不快感」(Qs1)、「不安/ふさぎ込み」(Qs2)である。「移動（基本的日常動作 ADL）」と「身の回りの管理（道具的 ADL）」は別レベルであるが並列されている。「痛み」と「不安」も同様であり、そもそも何に対する「不安」なのかは特定されていない。「ふだんの活動」は「生活」L2に関連しているものの、その内容はやはり包括的で漠然としている。この尺度の場合、指標が比較的少ない点は簡便さという面で有利ではあろうが、その反面、人間の生の多くの要素がそこから捨象されることになる。加えて、指標の選択の恣意性や指標が少ないがゆえのバイアスの増幅可能性もある。

三つ目は WHOQOL26 である<sup>(15)</sup>。指標は大きく「身体領域」、「心理領域」、「社会関係」、「環境」の四領域に分かれ、これに「全体総合」が加わる。それぞれの領域はさらに細分されて計 26 になる。順に見ていこう。「身体領域」(Qo1)では「日常生活動作」、「医薬品と医療への依存」、「活力と疲労」、「移動能力」、「痛みと不快」(Qs1)、「睡眠と休養」、「仕事の能力」が挙げられる。「心理領域」(Qs1+2+3)では「ボディ・イメージ」、「否定的感情」、「肯定的感情」、「自己評価」、「精神性/宗教/信条」である。「社会関係」(Qo2)では「人間関係」、「社会支援」、「性的活動」が挙げられる。「環境」(Qo2)には「金銭」、「自由や安全と治安」、「健康と社会的ケア」、「居住環境」、「新しい情報と技術の獲得機会」、「余暇活動への参加と機会」、「生活圏の環境」、「交通手段」が属する。そして「全体総合」には「生活の質の自己評価」(Qo2+Qs2)と「健康状態の満足度」(Qs1)が含まれる。この尺度は、WHO が全世界 15 センターの協力の下、周到な準備段階を経て完成させた WHOQOL100 の簡略版である。指標は他の尺度に比べると網羅的であり、そこには客観的要素と主観的要素がともに含まれている。しかし、領域の選定が部分的に「健康の定義」に基づいているとはいえ、領域間の関係も各細目の必然性も判然としない。例えば「社会領域」の三項目がそうである。また「心理領域」では「ボディ・イメージ」から「精神性/信条/宗教」までがレベルの区別なく並んでいる（ちなみに、この「精神性」は当初は別扱いであったが、検証を受けて一緒にされたという）。

以上を要するに、前節で提示した QOL の概念枠組みに照らす限り、部分的であれ網羅的であれ、いずれの尺度の指標も混然としており、経験的一般化の水準に止まっていることが分かる。

それにしても経験的一般化の水準を越えられないのはなぜであろうか。筆者らはその理由を、「生存／生活／人生」というレベル分けの視点が欠けていることに加え、とりわけ「生」の中心に位置する「生活」が構造的に把握されていないからだと考える。生活の「構造」が把握されない限り、指標の必然性を説明したり、その網羅性を標榜したりすることも、さらに客観的要素と主観的要素とを連関づけたり、主観的評価と客観的評価(測定)を対応させたりすることもできない。

### 3. ニーズ論と活動（機能）論

生活すなわち人間的活動の全面的な把握を標榜している理論がある。それが心理学分野の「ニーズ」論と哲学分野の「活動（機能）」論である。この両者がはたしてどこまで「構造」に接近しているのか、以下で検討してみたい。なお、社会学分野におけるパーソンズのシステム論も検討に値するが、ここでは割愛する。

「ニーズ (needs)」とはたんなる個人的な欲求 (want) ではなく、人類普遍的な要求または必要を指している<sup>(16)</sup>。日本の医療関係者のあいだで有名なニーズ論として、マズローの「五段階」説とキットウッドの「五枚の花びら」説である。後者については別論文ですでに論じているため<sup>(17)</sup>、ここではマズローの説を取り上げる。

マズローの言う五段階の内訳は、「生理的ニード」(L1)、「安全ニード」(L1+L2)、「社会的（愛と帰属）ニード」(L2)、「尊重（承認）ニード」(L2)、「自己実現ニード」(L2+L3)である<sup>(18)</sup>。この説の特徴は下位ニードが充足されてはじめて上位ニードに進むという階段式の捉え方である。なお、マズローは後に高齢期を考慮して六段階目の「自己超越ニード」(L3)を設定している。これについても別に論じているためここでは言及しない<sup>(19)</sup>。さて、批評に移ろう。QOLの概念枠組みに照らすならば、単一階段という捉え方そのものが疑問である。「生理的ニード」(L1)とそれ以外のニード (L2)は一直線上にはない。そもそもレベルが異なっており、両者は平行に進行するはずである。また、「社会的（愛と帰属）ニード」や「尊重（承認）ニード」に関しては、利害対立を前提にした交渉コミュニケーションと親密な一体化をめざす共同コミュニケーションとが区別されておらず、境界が曖昧である。さらに、「自己実現ニード」を最上段に置くところには特定の文明や時代の見方が反映されている。そして何よりも、そもそもなぜ「五」になるかの合理的な説明がない（ちなみに、この点はキットウッドの「五枚の花びら」説でも同様である）。

他方、哲学における活動（機能）論としてはハンナ・アーレントとマーサ・ヌスバウムの説が日本でも著名である。そのうちアーレントの場合、『人間の条件』(ドイツ語原題は「活動的生活」)の中で「労働 (labor)」、「制作 (work)」、「行為 (action)」が抽出され、また後年の『精神的生活』では「思考 (thinking)」と「意志 (will)」が論じられている。これらはたしかに生活(L2)

の諸側面であるが、体系的したがって構造的に連関づけられてはいない<sup>(20)</sup>。そこでより詳細に論じているヌスバウムの説を取り上げる。

ヌスバウムは、厚生経済学者のアマルティア・センから「人間の機能(活動)可能態(capability)」の観点を引き継ぎ、人類の文化横断的な経験をふまえて次の10項目を列挙する<sup>(21)</sup>。すなわち、「生命(寿命)」「(L1)」、「身体の健康」(L1)、「身体の不可侵性」(可動、境界)」「(L1)」、「感覚・想像力・思考力」(L1+L2)、「感情(愛情)」「(L2)」、「実践理性」(L2)、「連帯(A他者との共同関係、B他者と同等の尊厳)」「(L2)」、「自然との共生」(L2)、「遊び」(L2)、「環境のコントロール(A政治的には政治選択への参加、B物質的には財産の維持)」L2Qo2である。ヌスバウムが抽出した項目は人間的な活動の諸側面としては過不足ないように見える。しかし、QOLの概念枠組みに照らしてみれば、人の動物性を包含する生存レベルから人間的な生活レベルまで、本質的な特徴が区別なく並べられているだけともいえる。アーレントと同様にヌスバウムの説においても「構造」を窺わせるものはない。

以上の検討から浮き彫りにされるのは、心理学はもちろん、とりわけ哲学においてすら、人間の生の把握が経験的一般化の水準を超えていないことである。QOLの概念枠組みの中軸は「生活」であり、その実質は「人間的な活動」である。問題はこの人間的な活動が「構造」的に把握されているか否かである。繰り返しいえば、生活の「構造」が組み込まれていない限り、QOLの形式的な枠組みには実質がともなわず、客観的なQoと主観的なQsとが連関づけられない。経験的一般化の水準を超えて生の構造を全面的に把握するには、まったく新たな視点が必要とされる。それが次節以下で展開される<意味コミュニケーション>の視点である<sup>(22)</sup>。

#### 4. 意味コミュニケーション

「コミュニケーション」を大別すると二つの型になる。一つは発信側の情報が受信側にそのまま受けとられることをめざす情報伝達型であり、もう一つは情報の意味づけが受信側の解釈に委ねられる意味解釈型である。日常的な会話(コミュニケーション)は后者であり、それが機能的に限定されると前者に転化する。コミュニケーションの原形が意味解釈型であるとすれば、この型に則してコミュニケーションの本質を捉える必要がある(以下は森下直貴編『生命と科学技術の倫理学』(丸善出版、2016)の序章において詳述されている)。

「意味解釈」では同一の情報(表現)が文脈と受け手の違いによって多義的に意味づけられる。その際、表現とその意味との関係は必然的ではなく、いつでも「別様でありえた」という偶発性に伴われている。例えば、誰かの「手が上がっている」のを見たとする。まず、それが「手を上げる」という意図的な動作であるかが決定されなければならない。そして意図的だとみなされた場合、それが反対意見の表明であるか、タクシーを呼び止めるためか、柔軟体操を

しているのか、挨拶のつもりなのかは文脈に応じて違ってくる。さらに解釈が一つに絞られた場合、それに対する評価も様々であり、ましてやそれを受けた応答となると無尽蔵のバリエーションがあろう。

意味解釈型コミュニケーションの中でやりとりされるのは、受け手となる双方の側によって交互に解釈される<意味>である。この型が人間のコミュニケーションの原形であるならば、「コミュニケーション」を<意味解釈の相互接続>として定義できるだろう。以下ではこの点をあえて強調して<意味コミュニケーション>と表記する。本稿ではここまでQOLの概念枠組みの中心にある「生活」を人間的な「活動」とみなしてきたが、ここに至って「活動」の本質が<意味コミュニケーション>として捉え直される。自己内部の対話（自問自答）といえども、いかに秘匿されていようと、意味を通じて他者とコミュニケーション循環に組み込まれる限り、意味コミュニケーションなのである。

意味コミュニケーションの基本形は対面的コミュニケーションである。対面的コミュニケーションではこれに関わる双方の側の内部コミュニケーションが交流し接続する。生活すなわち人間的な活動の構造を把握するためには、この対面的コミュニケーションの内部で鏡合わせのように進行する意味解釈のプロセスを解明しなければならない。

まず、出発点は双方ともに「相手の心が読めない」という状況である（そもそも心が読めるのであればコミュニケーションするまでもなからう）。解釈の手がかりは表出された言動や表情である。これらの表現（一般には記号）を通じて相手の真意（意図）が探られる。探り合いの中から次第に双方の応答の形が浮かび上がり、これを織り込むことで予期や期待が生じる。そしてついに、応答の繰り返しの中から共通の接続パターン（型）が成立する。この共通パターンを前提にしたとき、コミュニケーションは不断に偶発性を抱え込みながらも滞りなく進行する。ただし、共通のパターンつまりは「コンセンサス（常識）」が成立した場合でも、その受け止め方が双方の側で完全に一致するという保証はない。ここに個別性（私秘性）の根拠がある。とするなら、常識とは見かけ上の一致あるいは一致の見せかけということになる。

具体例として「この部屋、なんだか暑いね」という発話をとりあげる。第一段階は「情報の認知」(A)である。発話の文字通りの認知や相手の表情の知覚から「暑がっている」様子に見える。第二段階は「意図の解釈」(B)である。発話が意図を伴ってこちらに向けられたメッセージだとして、その意図は何か、なぜいまここでそんなことを言うかが忖度される。「本当に暑いのか、話のきっかけ（時候の挨拶）にすぎないのか、温暖化問題を論じたいための誘い水なのか」といった具合である。第三段階は「解釈の比較」(C)である。「本当に暑くて何とかして欲しいと思っている」という暫定的な解釈が文脈や過去の事例や一般常識を総動員して比較検討される。その結果、「本当に暑いと感じているようだ。この場面で私が相手の立場だったら同じように切り出すかもしれない」。第四段階は「総合評価」(D)である。「今日の暑さでは誰だ



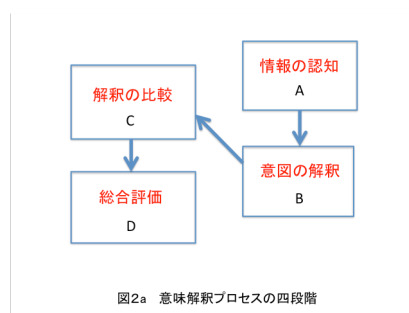
って暑いと感じるはずだ。彼の発言は正直だ」。これに続く段階は相手に対する応答の選択とその遂行（E）である。「冷房のスイッチを入れようか、窓を開けようか、それとも冷たい飲み物でも提供しようか...」。Eは引き続くプロセスにおいて相手によってAとして受け止められる（…→A→B→C→D…→E/A→…）。

## 5. 世界図式としての〈四区分表〉

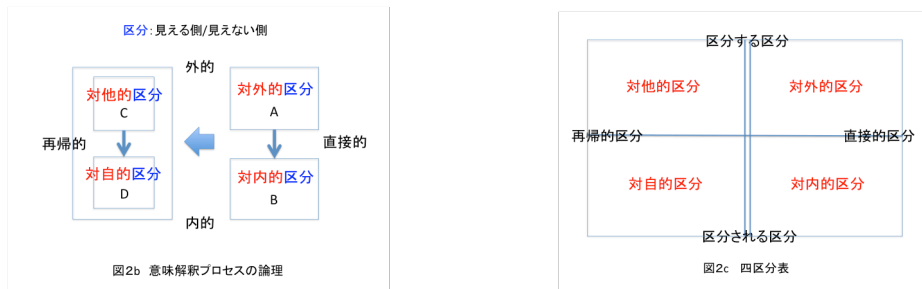
続いて、上述の意味解釈の内部プロセスの論理（筋道）を意味論の視点から浮かび上がらせてみよう。意味論の基本は〈区分〉である。視覚を例にとれば、見えているもの（例えば一個の柿）は、見えているままに実在しているのではなく、より精確にいうなら、見えていない側との区分を背後に秘めつつ見えているのである。「見える側／見えない側」という区分そのものは、輪郭づける視線つまり区切る境界線によって不断に維持されている。ここではこの区分の哲学的な基礎づけに立ち入ることはせず、先に進もう。

意味解釈の内部プロセスにおける最初の〈区分〉は、認知された情報（A「暑がっている様子」）である。これを〈対外的な区分〉としよう。この情報は相手側の発話の内的意図（B「窓を開けて欲しいのかな」）を指し示す。これは〈対内的な区分〉である。情報を記号表現として〈区分する区分〉とするなら、解釈される意図の方は意味内容として〈区分される区分〉になる。続いて意味解釈のプロセスは比較（C「温暖化の議論でも吹きかけるつもりか」）の段階に移る。ここでは類似した状況や他者一般が比較の対照とされる。これを〈対他的な区分〉とする。最後に、比較の吟味を受けた解釈が〈区別する区分〉となり、総合評価（D「こんな日は誰だって暑いにちがいない」）を〈区分される区分〉として指し示す。後者は自己評価を再帰的に組み込んだ〈対自的な区分〉である。

要するに、対面的コミュニケーションにおける意味解釈の内部プロセスは、意味づけ（区分づけ）のプロセスであり、そこには四区分のあいだの二重の連関が存在する。A→Bという〈外→内〉の区分づけは直接的なレベルの一階にあたる。それに対してC→Dという〈外→内〉の区分づけは再帰的なレベルの二階にあたる。一階における区分づけはA 対外的な区分（区分する区分）から B 対内的な区分（区分される区分）へとつながる。これが再帰的な二階の区分づけに移行すると、C 対他的区分（区分する区分）から D 対自的区分（区分される区分）へとつながる（ $A \rightarrow B \Rightarrow C \rightarrow D$ ）。



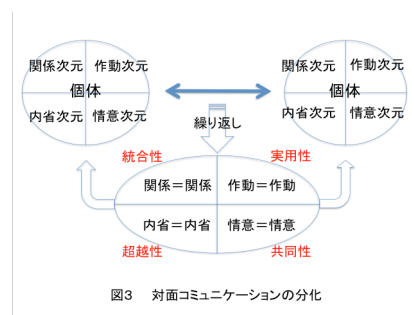
コミュニケーションは循環的に接続しつつ動的に変容する。この時間的な流れを二次元の平面パターン（構造）に変換できたなら、その図式を用いて意味コミュニケーション世界を構造として直観的に把握することが可能になるだろう。この一連の変換については図 2abc を見ていただきたい。ここに浮かび上がるのが〈四区分表〉である。これは任意の 2×2 マトリックスではなく、意味コミュニケーション世界の論理構造の図式である。筆者らは、この世界図式を適用することによって、意味世界の多種多様な事象が構造的に捉えられると考えている。この予見が妥当なものであるかを以下の諸節で確認してみよう。



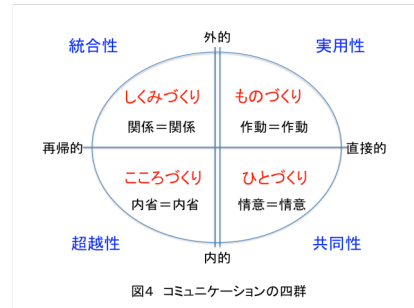
## 6. コミュニケーション分化の論理

ここまで論じてきたのは対面的コミュニケーションの基本形である。実際にはそこに関わる人物や状況の違いに応じて基本形は様々に分化し、種々のコミュニケーションが日々繰り返られることになる。そこで意味コミュニケーション群の分化を〈四区分表〉に基づいて論理的に捉えてみよう。この分化の論理はコミュニケーション群だけでなく、これを媒介することで、コミュニケーションを構成する個人の活動から全体社会の機能システムに至るまで、意味世界のすべてを貫いている。この分化の論理こそは本稿の基軸である（なお、論理へのアプローチは『生命と科学技術の倫理学』序章とは異なり、より進化している）。

対面的コミュニケーションにおいてつながり合う個人の内部コミュニケーションは、四区分の連関に沿って次の四次元をもつ。すなわち、A 対外的な〈作動〉次元、B 対内的な〈情意〉次元、C 対他的な〈関係〉次元、D 対自的な〈内省〉次元である。個人の〈活動〉はこれら四次元セットをもつ内部コミュニケーションの表現である。そして様々な状況の中で四次元セットのうちの一次元が突出し、相互に重なり合う中で対面的コミュニケーションが分化する。この次第は図 3 を見ていただきたい。



そこに立ち現われるのは次の四群のコミュニケーションである。すなわち、A<作動対作動>コミュニケーション群、B<情意対情意>コミュニケーション群、C<関係対関係>コミュニケーション群、D<内省対内省>コミュニケーション群である。志向する価値に関連させれば、それぞれ、A 実用性をめざす<ものづくり>群、B 共同性をめざす<ひとづくり>群、C 統合性をめざす<しくみづくり>群、D 超越性をめざす<こころづくり>群になる。図4を見ていただきたい。



具体例を示そう。最初のA<作動対作動>コミュニケーション群には、衣食住の暮らしの繰り返し、作業から作業への連続、手段の工夫の重ね合い、交換の循環が含まれる。これらはすべて生存のために事物を操作し利用する実用性に関連している。次のB<情意対情意>コミュニケーション群の例は、三世代にまたがる世話、病気・怪我の癒し、未熟な状態の発達、困窮者への援助である。これらはすべて親密な結びつきを求める共同性に関連している。三つ目のC<関係対関係>コミュニケーション群に含まれるのは、交渉の中での話し合い、和平調停の受け入れ、集合的な決定への忠誠、決まりの順守である。これらはすべて利害対立を調整する統合性に関連する。最後のD<内省対内省>コミュニケーション群では、楽しみ、感動、疑問、畏怖や感謝が次々とつながる。これらはすべて現実世界から想像的または理念的に距離をとる超越性に関連する。

以上の四群のコミュニケーションから種々の機能が自立し、それぞれが分立することを通じて、全体社会（広義の社会）における機能システムの領域が形成される。これも四区分表に従って四領域になる。すなわち、A 実用性に関連する広義の経済領域、B 共同性に関連する狭義の社会（共同体）領域、C 統合性の価値に関連する公共領域、D 超越性の価値に関連する文化領域である。これらはそれぞれ<四区分表>に従ってさらに16分野に区分される。図5を見ていただきたい。

まず、A 広義の経済領域では、狭義の生活（様式）のほか、労働（組織されると産業）、技術（組織されるとテクノロジー）、市場といった機能システム分野が相互に関連する。次に、B 狭義の社会（共同体）領域を構成するのは、育児・介護、医療、教育、福祉の機能システム分野である。さらに、C 公共領域において関連するのは、社交・

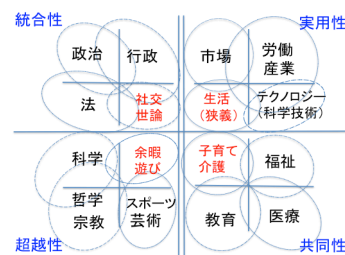


図5 機能システム領域

世論、法、政治、行政といった機能システム分野である。最後に、D 遊び・娯楽・趣味、科学

研究、芸術・スポーツ、宗教や哲学といった機能システム分野から構成されるのが文化領域である。これらの四領域は<四区分表>の論理構造に従って相互に関連し合い、全体社会（広義）を成り立たせている。

以上のように、個人の活動次元、コミュニケーション群、全体社会の機能システム領域のいずれであれ、同一の四区分構造が同型的（フラクタル）に繰り返されている。これが体系的であることの証左である。もちろん四区分の細部は経験のうちに求めざるをえないから、そこには完全というものはない。しかし、たとえどんなに不完全な構築物であろうと、改良の余地があって次の改良につなげられる（これがコミュニケーションである！）限り、経験的な一般化や固定した見方の批判に終始するより、その分だけ一歩前進だといえよう。

## 7. 個人の幸せ意識の再構成

意味コミュニケーションの四群連関を媒介の位置におくことによって、個人の活動の四次元と全体社会の機能システムの四領域とが同一平面上で対応することになる。これを図式化すると、**図6**になる。この図に表現されているのは、心理学のニード論や哲学の活動論では捉えられなかった人間の生活（L2）の構造そのものである。

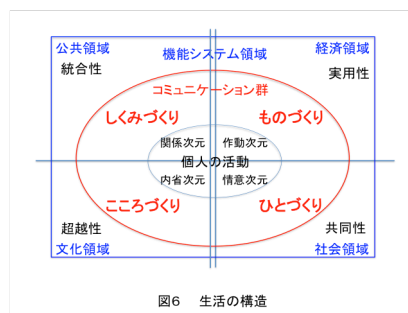


図6 生活の構造

この「生活構造」を共通の土台に据えることによって、L2の客観的なQo2と主観的なQs2とは初めて体系的に関連づけられる。以下、幸福心理学と幸福系経済学を検討する中で両者の関連づけを確認してみよう。

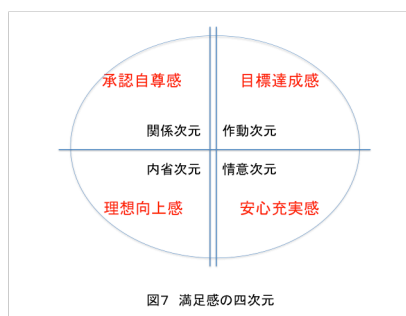
まずは人の主観的幸福感を研究する幸福心理学である。この研究は最初に高齢者の適応状況から始まり、後に高齢者を超えて一般化された。その中で、幸福度尺度（「あなたは幸せですか」）、生活満足度尺度（「収入に満足していますか」）、人生満足度尺度、感情的幸福（「肯定的感情・否定的感情」）等、測定時間の異なる様々な尺度が開発されている。研究者の一人、前野隆司は世界各国の研究を調べた結果、幸福に影響する要因を48項目にまとめている（前野隆司『「幸せ」のメカニズム』講談社現代新書、2013、249-255頁）。そこでは主観的要素も客観的要素も混在しているが、幸福心理学では客観的要素は方法論的に排除されている。以下、L2レベルの尺度の代表として前野の「幸せ四因子」説を検討する。

幸せの「四因子」の選定において用いられたのは辞書とアンケートとコンピュータである。そこから客観的要素を除いた26項目が次の四群にまとめられた。すなわち、「やってみよう」群、「なんとかなる」群、「ありがとう」群、「あなたらしく」群である。前野は各因子群の代表

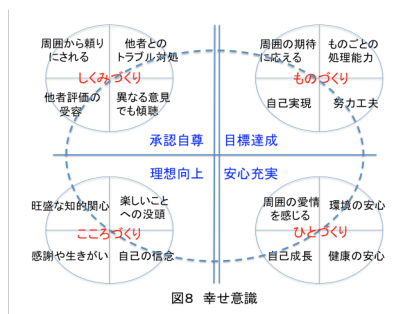
項目を4つずつ挙げている。まず「やってみよう」群では「コンピテンス（有能さ）」、「個人的成長」、「社会的要請」、「自己実現」である。次の「なんとかなる」群では「楽観性」、「気持ちの切り替え」、「積極的な他者関係」、「自己受容」になる。さらに「ありがとう」群では「人を喜ばせる」、「愛情を感じる」、「親切」、「感謝」となる。最後の「あなたらしく」群では「最大効果の追求（あれこれ目移りせず一貫している）」、「制約のない知覚（周囲のせいにはしない）」、「他者との比較」、「自己概念の明確さ」である。

前野の四因子説は表面的には<四区分表>の図式に驚くほど合致している。この点はじつに興味深いが、ネーミングが曖昧であるためか、四因子の相互連関や各細目の必然性が判然としない。その点では遠近の基準だけで分類するコンピュータとそれほど変わらない。そこで前野から離れ、<四区分表>に基づいて再構成してみよう。

そもそも幸せ感（意識）とは日々の生活（つまり人間の活動）に伴う複合的な満足感であり、これもまた個人の活動次元に沿って四つの次元に括られる。すなわち、作動次元の<目標達成>感、情意次元の<安心充実>感、関係次元の<承認自尊>感、内省次元の<理想向上>感である。図7を見ていただきたい。この四次元セットの満足感がコミュニケーション群に伴う。



続いて各因子群をコミュニケーション群に対応させるならば、「やってみよう」は<ものづくり>群に、「ありがとう」は<ひとづくり>群に、「なんとかなる」は<しくみづくり>群に、そして「あなたらしく」は<こころづくり>群に割り振られ、細目もフラクタルに配置される。ここに満足感を重ねることで幸せ意識の構造が浮かび上がる。図8を見られたい。構造をもたない四因子説との違いは一目瞭然である。



繰り返していえば、あくまで満足感は四次元セットであり、コミュニケーション活動を通じて客観的な機能システム領域と関連している。つまり、客観的世界におけるコミュニケーション活動に伴う満足感なのである。したがって、客観的な関連づけが不明瞭であれば、満足感（幸せ意識）は志向対象を欠いた心理状態の自己評価にすぎなくなる。そこに反映しているのは評価する本人の「性格」にほかならない。

## 8. 国民の幸福の再構成

続いて幸福経済学に目を転じよう。この分野では幸福に影響を及ぼす客観的要素に対する主観的評価と客観的評価が研究される。例年、世界国別豊かさ（幸福）ランキングが発表されている。有名な尺度の一つとして国連開発計画の「人間開発指標」があり、これは「国内総生産（GDP）」、「教育」、「平均寿命」の三つの客観的指標からなる(前野：51 頁)。また、「持続可能な開発ソリューションネットワーク」の「世界幸福度レポート」(World happiness report)もある(Web)。この尺度では客観的指標に混じって「感情的幸福」の項目(Dystopia)もあるものの、その名称も中身も部外者には少々意味不明である(2016：16-18 頁)。そこでより詳しく検討するために以下の四つの尺度をとりあげたい。

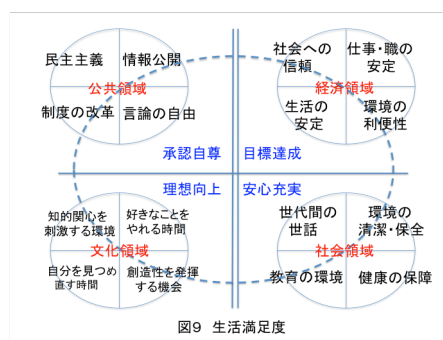
まずは『新国民生活指標（豊かさ指標）』（略して『新国民』）である（平成 10 年度版、経済企画庁国民生活局）。これは「ひとの活動領域」と「生活評価軸」の二部門に分かれる。前者はさらに「住む」、「費やす」、「働く」、「育てる」、「癒す」、「遊ぶ」、「学ぶ」、「交わる」の 8 項目に分かれ、後者は「安全・安心」、「公正」、「自由」、「快適」の 4 項目からなる。以上の構成を<生活構造図式>に照らして検討してみよう。「ひとの活動領域」は概ねコミュニケーション群に対応する。しかし、なぜ 8 項目かの説明はない。例えば「交わる」は<ひとつづくり>(B)だけでなく、<しくみづくり>(C)にも関係している。他方、「生活評価軸」はコミュニケーション群から機能システム領域までを貫く「価値」に関連した主観的評価である。すなわち、「安全・安心」は「共同性」(B)、「公正」は「統合性」(C)、「自由」は「超越性」(D)、「快適」は「実用性」(A)のそれぞれ一部に対応している。しかし、活動領域の 8 項目と生活評価の 4 項目とが関連づけられていない。結局、この『新国民』はコミュニケーション群に対して（客観的価値に関連する）主観的評価を試みたものとして興味深く、また使用されている用語にもセンスを感じるが、生活に構造の視点が組み込まれていないため体系的でない点が惜しまれる。

次は『全国 47 都道府県幸福度ランキング 2016 年度版』（略して『全国』）である（寺島実郎監修、日本総研編、東洋経済新社、2016）。上記の『新国民』に基づく調査は県民比較を嫌う声を受け、1999 年以降中止された。それに代わって民間のシンクタンク（日本総研）によってまとめられたのがこの『全国』である。ここでは客観的指標が細かく抽出されて計 60 に及ぶ。指標群は大きく二分される。一つは「基本的指標」であり、ここには「人口増加率」、「一人当たりの県民所得」、「財政健全度」、「戦況投票率（国政）」、「食料自給率」が含まれる。もう一つが主要「5 指標」であり、それらにはそれぞれ二分野が含まれる。すなわち、「健康（医療・福祉および運動・体力）」(B)、「文化（余暇・娯楽および国際交流）」(D)、「仕事（雇用および企業）」(A)、「教育（学校および社会）」(B)、「生活（個人および地域）」(A+B)である。残念なことに、この『全国』には客観的指標に対する客観的評価しかなく、主観的評価が組み込まれていない(13 頁、2 頁)。この点では『新国民』から後退している。

今回は有名なブータンの国民幸福度尺度（GHP）をとりあげよう（Web）。これは次の9項目からなる（なお、細目の設定は地域性や国情に合わせて任意である）。すなわち「心理的幸福（例えばストレス、利己心との均衡）（B）」、「精神（信仰）」（D）」、「環境の多様性（川・土地の名称、汚染、植林など）」（B）」、「健康」（B）」、「教育（識字率、歴史、民話）」（B）」、「文化（方言、伝統的スポーツ、祭り、職人、躰、道徳）」（B+D）」、「生活水準」（A）」、「時間利用（労働、睡眠）」（A）」、「コミュニティ活性」（B）」、「統治（自由度、メディア、政策実行力）」（C）である。この尺度では、「心理的幸福」は主観的指標であり、それ以外はすべて客観的指標である。「統治」指標は他の三つの尺度には見られない特徴である。この尺度の背後には明確な哲学があり、GDP 中心主義を批判して精神的価値との調和を主張する意気込みはたしかに伝わる（ブータン政府観光局公式サイト）。しかし、指標の必然性や指標間の関連性が見えないため、体系性の点では中途半端といわざるをえない。

最後は「国民生活選好度調査」である（内閣府、2008-2010）。指標として挙げられるのは、「健康状態」、「家族関係」、「家計状況」、「所得」、「消費」、「自由な時間・充実した余暇」、「就業状況・仕事の有無」、「安定」、「友人関係」、「仕事・趣味・社会貢献などの生きがい」、「職場の人間関係」、「地域コミュニティとの関係」、そして「その他」である。この尺度では、「健康状態」（L1）と「生きがい」（L2+3）だけが主観的要素であり、それ以外は客観的要素である。＜生活構造図式＞と照合するなら、「家族関係」と「友人関係」と「地域コミュニティとの関係」はB狭義の社会（共同体）領域に、「自由時間・充実した余暇」はD文化領域に、「家計」や「所得」、「消費」、「就業」、「安定」はA広義の経済領域にほぼ対応する。しかし、ブータンのGHP指標にはあった「公共領域」がない。取り上げられた指標はたしかに網羅的であるが、ここでも指標間の内的関連性がない。

以上で検討した四つの生活満足度尺度は総じて経験的一般化の水準に止まっているが、筆者らの見解では、それは生活の「構造」が組み込まれていないからである。この点を考慮して幸せ意識と機能システム領域とを重ね合わせてみたのが図9である。ここでは指標が四群に分かれ、各細



目は16になる。すなわち、A＜ものづくり＞コミュニケーション群では「生活の安定」、「職業（有無、正規不正規）」、「利便性や安全性」、「社会に対する信頼」になる。また、B＜ひとづくり＞コミュニケーション群では「子育て・介護」、「健康の安心」、「住宅・環境の安心」、「教育の機会」になる。さらに、C＜しくみづくり＞コミュニケーション群では「表現の自由」、「制度の改革」、「意見の反映」、「情報公開」になる。最後のD＜こころづくり＞コミュニケーション群には「自由時間」、「創造的表現」、「知的探求」、「意味への問い」が含まれる。この図式は質

問事項を適当に変更すれば個人にも国民にも適用できるはずである。

## 9. 人間の〈生〉の全体構造

本稿はここまで〈四区分表〉に依拠しながら、生の中心にある「生活」レベルの「構造」を図式として把握し、この「構造図式」を土台にして客観的な  $Q_0$  と主観的な  $Q_s$  とを連関づけてきた。人間の生にはもちろん生活レベルの他に生存レベルや人生レベルがあり、これら三レベルが連関して生の全体を成り立たせている。以下ではその全体としての生の構造の把握に努めてみたい。

### 9.1 生存の構造

「生活」が人の人間的な活動の全体であるのに対し、「生存」は人の生物としての行動の総体である。これを構造的に把握するためには、個々の欲求やニードの手前にある動物的な本能ないしは欲動を考慮する必要がある。そして欲動を論じるなら、フロイトの学説との対決は避けられない。周知のようにフロイトは欲動を生（自我）欲動と性欲動に分けたが、後にその二大欲動をエロス（性＝生）とタナトス（死）の対置へと転換させた。この転換プロセスについては別著書の中で詳細に跡づけているため<sup>(23)</sup>、ここでは批判部分だけに言及する。

欲動の中軸は自己回復の欲動である。これは平衡状態をたえず回復しようとする動的プロセスであり、健康感覚の生物学的な基盤である<sup>(24)</sup>。ところが、フロイトの欲動論には生命システムに根ざした自己回復の欲動が欠落している。つまり性や死はあっても健康がない。そこでフロイトを超えて欲動世界を改めて再構成する必要がある。筆者らの考えでは、欲動世界は〈自己回復〉を中心にして A〈個体保存〉、B〈親的庇護〉、C〈性的独占〉、D〈現実遊離〉の四次元から構成される。ただし、意味世界の論理構造がそのまま欲動世界に適用され、後者を明確に区分するわけではない。

欲動世界に深く根ざしている生物学的な行動、したがって生存レベルで行われるコミュニケーションは、〈意味コミュニケーション〉ではなく〈情動コミュニケーション〉である。この両者は人間的な活動（生活レベル）では混然一体となって進行するが、対面的な場面において影響力がはるかに強いのは、周知のように情動コミュニケーションの方である。その点をふまえて「生存構造」を捉えると図 10 になる。すなわち、A 作動次元では運動と食事ができること、B 情意次元では情動が安定していること、C 関係次元では情動

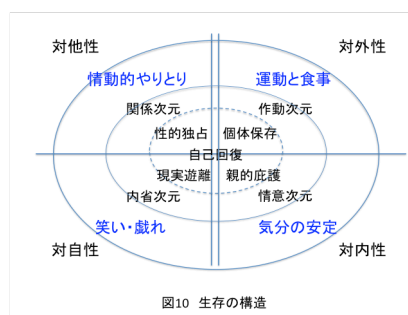


図10 生存の構造

コミュニケーションの方である。その点をふまえて「生存構造」を捉えると図 10 になる。すなわち、A 作動次元では運動と食事ができること、B 情意次元では情動が安定していること、C 関係次元では情動



的なやりとりができること（性的なふるまいを含む）、そして D 内省次元では面白いことに笑えること、である。

生存構造の図式を土台において客観的指標 L1Qo1 と主観的指標 L1Qs1 を対応づけてみるなら、質問項目は次のようになる。A : Qo1 身体動作がうまく出来るか / Qs1 身体に痛みや違和感がないか（食事をどのくらい食べているか / 食事を美味しく食べているか）、B : Qo1 落ち着いているように見えるか / Qs1 不調や不安を感じているか、C : Qo1 表情で気持ちを伝えられるか / Qs 表情から気持ちを察知できるか（性的に活発にふるまうか / 性的な関心があるか）、D : Q1o 物事に集中したり笑ったりしているか / Qs1 毎日楽しいと感じているか。

## 9.2 生活のミニマム

健康の原点は痛みや違和や不調を感じない状態であり、この背後では「生命」レベルの自己回復の運動が循環している。この原点を<狭義の安らぎ>（安らいだ状態）とすれば、「生存」レベルの生物行動がめざすのは、先に示した四次元セットからなる<広義の安らぎ>といえる。これが「生存」の原点である。しかし、「生活」レベルの人間活動の目標は「生存」レベルをはるかに超える。筆者らの考えでは、その目標は<日常生活>そのものに他ならない。人は平凡で退屈な日常生活が失われたとき、初めて日常の平穏と平和の有り難さや大切さに気づかされる。この点は末期癌の患者でも、被災者でも、事故や事件の被害者でも変わらない<sup>(25)</sup>。

それでは一歩進めて、日常生活の原点（基本）とは何か。これは生存レベルの四次元の延長線上に浮かび上がる次のような像である。すなわち、「少しでも自分でやれることをして人の役に立つ」、「温かく受け入れてくれる居場所がある」、「他人からたんなる物体のように扱われない」、「ささやかな楽しみごとを分かち合う」の四次元である。これらの四次元はセットであり（これを<セット思考>と呼ぶ）、どれか一つが欠けても日常生活の原点（基本）にはならない。言い換えれば、それは生活の<ミニマム>なのである。おそらく、この四次元セットとして尊重することが、一個の人を「人間として尊重すること」の核心にあるのだろう。

生活ミニマムの確定は社会制度の根幹に関わっている<sup>(26)</sup>。日本では現在、多岐にわたる社会保障をはじめ、年金、納税、手当、労働賃金、住宅保障等の基準設定のさい、事実上の共通基準とされているのが「生活保護受給基準」である。問題は、「相対的貧困」の線引きを行うその基準そのものが著しく合理性を欠いていることである。例えば、OECD 基準では全国民の収入の中央値の半分以下が相対的貧困層とされるが、日本では戦後の社会事情に応じてマーケットバスケット方式など種々の計算方式があり、それらが積み重なって複雑な計算を必要とする。そして最終的に、平均収入の 6 割あたり（現在はおおよそ 17 万円）に収まるよう微調整される。しかし、相対的貧困を抱え込む超高齢社会の本格的な到来に備えるためには、ベーシックインカム云々の前に、住宅環境を含めて「生活構造」に基づいた議論と対策が必要である。その鍵

を握るのが生活ミニマムの設定なのである。

### 9.3 人生の構造

最後に、「生活」を時間的に包括する「人生」レベルに目を移そう。人生構造は四つの包括的な活動圏から構成される。すなわち、A<ものづくり>活動圏、B<ひとづくり>活動圏、C<しくみづくり>活動圏、D<こころづくり>活動圏である。図11を見ていただきたい。これらの活動圏は<生活構造>の活動群を同心円状に拡張したところに位置づけられ、それぞれ A 実用性の価値をめざす広義の経済領域、B 共同性の価値をめざす狭義の社会領域、C 統合性の価値をめざす公共領域、D 超越性の価値をめざす文化領域と関連している。

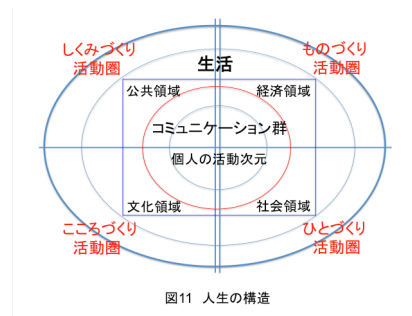


図11 人生の構造

人生 L3 レベルの Qo3 は、各文明・文化の中で培われてきた「理想」、つまり理想的人間像として解釈できる。試みに主要文明の「理想」を簡略ではあるが列挙する(27)。まず、ギリシア文明の理想はロゴスを駆使する「知者」である。その中で主流の「ソフィスト」対抗したのが「フィロソフィスト」プラトンである。次のアフロ=アジア（セム）系文明の「理想」は超越神の言葉を授かる「預言者」である。この内部から神との一体化を求める神秘主義者が登場する。続いてインド文明に目を転じるなら、ここでの「理想」は人間の動物性を不浄とみなして否定し、ひたすら清浄な聖の境地に到ることを願う「行者」である。後に現世の汚辱の中で人々を救済する「菩薩」も出現する。最後に、中国文明では有徳な「聖人」が理想とされるが、これに対抗したのが老荘的「賢者」である。そして日本文化では、インド文明と中国文明から学ぶ中で、芭蕉や北斎のように一芸の道を極めた「達人」が「理想」とされてきた。

人生の構造をふまえ、伝統的な理想に照らし合わせながら、自分の人生を反省するところに幸福観すなわち全体的な満足感が生じる。7で指摘したように満足感には四つの次元がある。しかし、幸せ意識の場合と同様、幸福観が人生の包括的な活動圏と連関しない限り、本人の性格の反映と変わらない。その例がディーナーの「人生満足度尺度」である（大石：48頁）。そこでは次の質問が並んでいる。「私の人生はほとんどの面で私の理想に近い」、「私の人生はとても素晴らしい状態である」、「私は自分の人生に満足している」、「私はこれまで自分の人生に求める大切なも

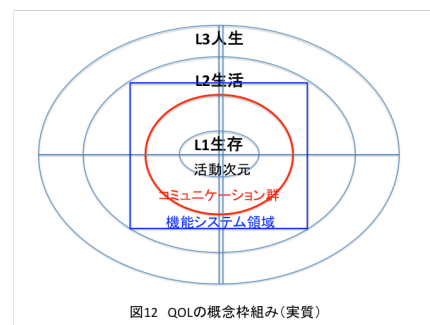


図12 QOLの概念枠組み(実質)

のを得てきた」、「もう一度人生をやり直そうとしてもほとんどなにも変えないだろう」。正直な話、これらの質問に答えるのは難しい。なぜならその尺度では「構造」が見えないからである。

\*

以上ここまで、生活の構造の把握から出発して生存から人生へと進み、ようやくいま人間の生の全体構造にたどり着くことができた。三レベルの構造を組み込んで実質化された QOL の枠組みを真上から見下ろすと、[図 12](#) になる。

### おわりに／人間として尊重すること

本稿では、意味コミュニケーション世界の論理図式である〈四区分表〉に基づいて、生存・生活・人生の三レベルからなる「人間の生の構造」を全面的に把握してみた。この構造全体の中軸が〈生活構造〉である。この構造図式を QOL の概念枠組みに組み込み、QOL の客観的側面と主観的側面の共通の土台とすることによって、両者を同一平面上で対応させることが可能になる。このことは心理学のニード論でも哲学の活動（機能）論でも為しえなかった。

今日、老人介護の現場では「尊厳」の理念が謳われつつも、一人ひとりを尊重するという目標から乖離した現実が生じている。しかし、人間の生の全体を「構造」の視点から捉えるなら、安易に「問題行動」とされたり、マニュアル的に「疾患」を疑われたりする老人の言動のほとんどすべてが、情動コミュニケーションに根ざした〈意味コミュニケーション〉の表出として捉え直されるだろう。例えば「周囲の響きを買う性的ふるまい」は、生物の〈性的独占〉と〈親的庇護〉の欲動によって駆動されつつ人間的な〈承認自尊〉と〈安心充実〉の満足感を求める、じつに人間的なコミュニケーション活動として立ち現れる。この点は適当な変更を加えれば「徘徊」や「孤立」や「自慢話」においても当てはまる。結局、〈意味コミュニケーション〉の視点から一人ひとりの老人に接することが、大げさな理念を持ち出さなくても、日常生活の中で相手をさりげなく「人間として尊重すること」にほかならないといえよう。

今後の課題は、人間の生の構造をさらに具体的に肉付けし、構造図式をいっそう精錬し、現場で実際に使える QOL 尺度を作成することである。そのためには哲学者がもっと現場に出て行き、関係者や専門家と交流を深め、共同作業を立ち上げる必要がある。本稿はそのためのささやかな基礎工事である。

注

- (1) 「介護」という言葉は明治時代の傷痍軍人の世話から始まるが、1970 年台後半からは「障害者」に用いられ、さらに 2000 年の「高齢者介護法」以降は「高齢者（「老人」）に特化さ

れる。本稿では「介護」を「高齢者（老人）介護」に限定して用いる。新村拓『ホスピスと老人介護の歴史』法政大学出版局、1982』および岩田直美『社会福祉のトポス』（有斐閣、2016）が参考になる。

- (2) 介護実務者研修カリキュラムのテキスト第1章「人間の尊厳と自立」。
- (3) 加藤泰史編『尊厳概念のダイナミズム』法政大学出版局、2017。
- (4) 森下直貴「＜老成学＞の構想-老人世代の「社会的再関与」によるコミュニティ再生への展望」（『浜松医科大学紀要（一般教育）』30：1-43、2016）および同「＜垂直のコミュニケーション＞という希望——最晩年期における「老の中の死」の意味」（『死生学年報2017』東洋英和女学院大学死生学研究所、リトン、2017）
- (5) 「図式」という着想はN. ホワイトヘッド（1978）『過程と実在』（平林康之訳、みすず書房、1983）の序章に刺激を受けている。
- (6) この点については筆者（森下）のHP（システム倫理学）を見られたい。
- (7) 「ウェルビーイング」、「幸福」、「健康」については森下直貴『健康への欲望と＜安らぎ＞』（現代批判の哲学シリーズ20、青木書店、2003）の序章で論じている。
- (8) 以上の経緯については前野隆司『幸せのメカニズム』（講談社新書、2013）、大石繁宏『幸せを科学する』（新曜社、2009）、大竹文雄+白石小百合+筒井義郎『日本の幸福度』（日本評論社、2010）などを参考にした。
- (9) 例えば、ジョンセン（1977）『臨床倫理』（赤林朗監訳、医歯薬出版、2009）ではQOLが四分割表の一角を占めている。
- (10) この総括レビューについては古谷野亘「社会老年学におけるQOL研究の現状と課題」（J. Natl. Inst. Public Health, 2004; 53(3): 204-208）および下妻晃二郎「QOL評価の歴史と展望」（『行動科学研究』21（1）：4-7、2015）がある。
- (11) 社会医学者の森本兼襄氏のご教示による。
- (12) 『臨床のためのQOL評価ハンドブック』池上直己ほか著、医学書院、2001。
- (13) Quality of life in Alzheimer's disease: patient and caregiver reports. Logsdon RG, Gibbons LE, McCurry SM, Teri L. J Ment Health Aging. 1999;5:21-32.
- (14) EuroQol—a new facility for the measurement of health-related quality of life. EuroQol Group, Health Policy. 1990 Dec;16(3):199-208.
- (15) WHOQOL Measuring Quality of Life, Division of mental health and prevention of substance abuse, World Health Organization, 1997.
- (16) 欲求・要求・欲動の概念については前出『健康への欲望と＜安らぎ＞』第3章で詳述している。
- (17) 前出「老成学の構想」論文で論じている。

- (18) Maslow, A.H., 1986, *Toward a Psychology of Being*, 2<sup>nd</sup> ed., D. van Nostrand Company, NY.
- (19) 前出「<垂直のコミュニケーション>」論文で論じている。
- (20) アーレントについては特別研究員の稲垣氏のご教示を得た。
- (21) ここでの説明は堂園俊彦「人間の尊厳・福祉・ケア」(『生命倫理』27(1)、2017)に依拠している。ただし、評価は筆者らの見解である。
- (22) 哲学的な意義づけについては別論を準備中である。『哲学の変換と知の越境』法政大学出版局、2018年春刊行予定。
- (23) 前出『健康への欲望と安らぎ』の第3章。また、生命と回復——<規準>としての健康(『比較思想研究』36:14-23、2010)でも前者の内容が簡潔に要約されている。
- (24) 森下直貴「健康／病氣——滞りなく流れる循環という視点」(『生命倫理の基本概念』(シリーズ生命倫理学第2巻、丸善出版、2012)第6章。
- (25) 前出『健康への欲望と<安らぎ>』序章。
- (26) ここでの説明は岩田正美の『現代の貧困』(ちくま新書、2007)および前出『社会福祉のトポス』をふまえている。
- (27) 主たる参考文献を列挙する。佐々木毅『プラトンと政治』(東京大学出版会、1984)、ハンス・ヨナス(1964)『グノーシスの宗教』(秋山さと子+入江良平訳、人文書院、1986)、市川裕『ユダヤ教の精神構造』(東京大学出版会、2004)、井筒俊彦『イスラーム文化』(岩波文庫、1991)、阿部謹也『西洋中世の愛と人格』(朝日新聞社、1992)、R.G.バンダルカル(1982)『ヒンドゥー教』(島岩+池田健太郎訳、せりか書房、1984)、ルイ・デュモン(1980)『ホモ・ヒエラルキクス』(田中雅一+渡辺公三訳、みすず書房、2001)、白川静『中国の古代文学(一)(二)』(中公文庫、1980+1981)魚住孝至『道を極める—日本人の心の歴史』(放送大学教育振興会、2016)。